大正期におけるフレーベル主義者たちのモンテッソーリ教育法との接触
―頌栄保母伝習所創立者・アニー・L・ハウを中心に―

Introduction of the Montessori Method to Japan by Froebliam in the Taisho Era; Focus on Annie Lion Howe

(2000年3月31日受理)

西　川　宏　子
Hiroko Nishikawa

Key words：モンテッソーリ教育法 Montessori Method，フレーベル主義者 Froebeliam

1．研究の目的

二十世紀初頭に登場したモンテッソーリ教育法は，今日もなお世界の就学前教育に影響を与え続けている。わが国におけるモンテッソーリ教育法の受容は，大正新教育運動の気運に乗じて行われた。欧米諸国においても新教育の潮流の中で，モンテッソーリ教育法は，その地位を確立していったのである。モンテッソーリ教育法の普及は，次の3方面より押し進められた。1つは，新聞雑誌及びモンテッソーリの著作物などの文献による紹介，2つは，その紹介者らによるモンテッソーリ教育法の講習会・講演会，そして3つはモンテッソーリ教具の販売であった。特にモンテッソーリ教育法の講習会・講演会には，同教育法の実践を試みようとする多くの参加者が集った。わが国におけるこれらのモンテッソーリ教育法の受容活動は，文献に依拠した間接的な受容が主流であった[1)]。

しかし，欧米諸国においては，モンテッソーリ協会によるモンテッソーリスクール「子どもの家」への直接の参観や，モンテッソーリによるモンテッソーリ教育法が実践できる教員の養成が行われ，直接的な受容が盛んであった。その多くは，フレーベルの教育思想を根幹とした幼稚園教育に携わっている者であった。アメリカでは，19世紀末より科学的児童研究の立場から幼稚園の理論と実際を研究しようとする「進歩派」と，フレーベル主義を遵守しようとする「保守派」との間に論争が起こっていた。この二派の論争はアメリカ万国幼稚園連盟(I·K·U)でも盛んに行われ，心理学などの科学的研究の発展と共に「進歩派」が優位となりつつあった。このような状況の下にモンテッソーリ教育法がアメリカに紹介されたのであった。

近代日本の幼児教育は，ドイツのフレーベル教育思想の幼稚園を模範とした恩物中心のフレーベル主義から始まる。日本にもアメリカの幼稚園教育の論争の情報は，倉橋惣三などによりもたらさ

れ，恩物中心のフレーベル主義は批判の的となりつつあった。大正10年２月10日現在で文部省普通学務局が調査したところによると[2]，調査対象の681園の中で，保育に「モンテッソリー式を加味スルモノ」と回答したのは10園に過ぎなかったが，「フレーベル式及モンテッソリー式ヲ加味スルモノ」と回答した園は252園もあった。一方「フレーベル式ヲ加味スルモノ」との回答は302園であった。大正期の日本の幼児教育は，依然としてフレーベル主義が主流ではあった。しかし，僅か数年で日本の半数近くの幼稚園に導入されていったモンテッソーリ教育法が日本の幼児教育にもたらしたものは何であったのだろうか。当時の幼稚園関係者は何をモンテッソーリ教育法に求めたのであろうか。日本的特徴の一つとして，多くの幼稚園が従来のフレーベル主義と平行してモンテッソーリ教育法を保育に取り入れた状況がある。先述したように日本でのモンテッソーリ教育法の受容は文献中心の間接的なものが主流であり，イタリアやアメリカで開設されたモンテッソーリスクールを訪問するものは僅かであった。参観報告を行った者の中に，頌栄保母伝習所を創立したアニー・リオン・ハウ（Annie Lion Howe）がいた。ハウは，モンテッソーリのサマースクールを受講した経験を日本への帰任直後に２回講演している。ハウは，近代日本の保育者養成に貢献した人物であり，フレーベル教育思想の紹介による功績があまりにも著名である。そのためか先行研究では，モンテッソーリ教育法に関しては論じられることはなかった[3]。当時の日本では最もフレーベルを理解していた一人であるハウのモンテッソーリ教育法への姿勢は，フレーベルを土台としてモンテッソーリ教育法を実践する上での模範となったといえよう。

本研究の目的は，ハウの二回の講演内容の分析に焦点をあて，フレーベル主義を取っていた彼女がモンテッソーリ教育法の如何なる部分を受容しようとしたのかを明らかにすることを目的とする。このことを通して，フレーベル主義との共存という大正期の日本のモンテッソーリ教育法の受容の一側面を明らかにすることとなると考える。

２．ハウとモンテッソーリ教育法との出会い

Ａ・Ｌ・ハウ（Annie Lion Howe）は，1852年にアメリカ合衆国マサチューセッツ州で誕生した。1867（明治元）年にロックフォード女子専門学校に入学，音楽を専攻した。1876（明治10）年には，シカゴ・フレーベル協会保母伝習学校に入学した。その後，幼稚園を開設して３年間幼稚園長を務め，キリスト教宣教師として1886（明治19）年に来日した。ハウの目的は，キリスト教の布教と神戸基督協会の幼稚園開設にともなう保育者の養成であった。1889（明治22）年，頌栄保母伝習所を神戸に開設した。そこでハウは，音楽とフレーベル教育思想を教授したのであった。

しかし，ハウの母国アメリカより19世紀末より始まった恩物の形式主義的な活用への批判は，フレーベル主義への批判となり，幼稚園不要論まで論じられるようになった。1885（明治18）年に開かれた全国教育会（National Education Association）の幼稚園部の第１回大会の席上，会長のヘイルマン（William Heilman）は，幼稚園の教育原理は何であるかという問題を提起し，幼稚園で行われている恩物至上主義的な教育を批判した[4]。さらに1890（明治23）年，同じく幼稚園部大会

でブライアン（Anna Bryan）は，恩物の象徴主義的体系とその機械的な操作を批判し，「幼稚園は子供の内的な要求を見失わない創造的な教育を行うべきである」と指摘した[5]。続いて1895（明治28）年の大会においても，会長であるフィーロック（Lucy Wheelock）は，子どもそのものを研究すべきこと，そして恩物の象徴主義に追従するよりもフレーベル自身を研鑽すべきことを説いた[6]。しかし，ハウが会長を務めるJKU(The Kindergarten Union of Japan)[7]は先述したIKUの支部であり，フレーベルの教育思想を大切にしながら心理学的な研究も幼児教育の中に導入しようとする中間派の影響が多く見受けられる[8]。これは，ハウとの中間派のハリソンとの親交によるものと考えられる。フレーベルと新しい研究との両立という姿勢は，後のハウのモンテッソーリの受容に影響を及ぼす。

一方日本では，フレーベル会の中心者であった倉橋惣三が「フレーベルが今日なほ居りまして，新しい児童研究の結果を知られましたならば，必ずやこの恩物主義を撤回されるであろう」と批判した[9]。

このような背景のもと登場したモンテッソーリ教育法は，障害児教育の枠を越えて，幼児の自由を保障した上での早期教育として脚光を浴びたのであった。

1913（大正２）年１月にローマに開校した最初のモンテッソーリスクールは，87名中アメリカからの留学生が60名を占め[10]，これらの卒業生は，帰国してモンテッソーリスクールを開校した[11]。

この時期にハウはモンテッソーリ教育法の受容を始めた。ハウのモンテッソーリ教育法との接触の経緯を表１にまとめた。

表１　Ａ・Ｌ・ハウのモンテッソーリ教育法の受容の経緯

1913（大正２）年１月	渡米
夏	シカゴにてモンテッソーリサマースクールに参加
12月	モンテッソーリ渡米
1914（大正３）年７月	帰国（モンテッソーリ教具を持ち帰る）
7/31～8/1	第８回ＪＫＵ総会でモンテッソーリ教育法の講演
９月	ハウ帰国歓迎会の席上，モンテッソーリ教育法について講演
	アメリカよりモンテッソーリ教具を取り寄せる。
1915（大正４）年９月	神戸児童学会第１回常集会にてモンテッソーリ教育法の実践を講演
	頌栄保母伝習所のカリキュラムにモンテッソーリ教育法を取り入れる

1913（大正２）年１月にハウは，長期の休暇を利用してアメリカの両親のもとに戻った。ハウは，シカゴでミス・ハリソンが1913（大正２）年に開設したモンテッソーリサマースクールに参加した。ハリソンの講義やモンテッソーリ教具の解説を聴講し，週２回実施された幼稚園の理論と実践に関するこの新しい方法についてのデイスカッションにも加わった[12]。同年12月にモンテッソーリが訪米した。彼女への熱狂的な歓迎は，連日新聞・雑誌に取り上げられた[13]。ハウは，アメリカの

モンテッソーリ教育法への関心が最高潮に達した時期をアメリカで過ごし，翌1914（大正３）年７月に日本に戻った。

３．ハウのモンテッソーリ教育法に関する講演

日本に帰任したハウを待っていたのは頌栄保母伝習所関係者だけでなく，京阪神連合保育界全体でもあった。ハウは日本に帰任した直後にモンテッソーリ教育法に関する講演を２回行っている。この二つの講演内容の分析によりハウがモンテッソーリ教育法の如何なる部分に関心を持ち，従来自ら押し進めてきたフレーベル教育思想による幼児教育観に反映しようとしているのかを検討した。ハウは，わが国におけるフレーベル教育思想の紹介者としての功績が高く評価されているため，ハウに関する先行研究ではモンテッソーリ教育法への言及はほとんどない。そのため，本研究ではできるだけハウの講演内容全文の分析を行うように努めた。

まず，大正３(1914)年７月31日から８月１日には，JKUの第８回総会の席上で「アメリカにおけるモンテッソーリの方法」と題して講演を行った。講演内容をJKUの機関誌に以下のように掲載している[14]。

アメリカにおけるモンテッソーリ教育法

1931年７月のシカゴ新聞にはモンテッソーリ婦人に関する以下のような記事が掲載してある。

「モンテッソーリ博士は，未だかってないほど立派なイタリア女性であるとの評判が高く，現代における素晴らしい母であり教育者でもある。博士が，７年前，全女性に対して今までにない最高の栄誉であるローマ大学からの医学博士号の学位を取得し，大学の中からローマの街に飛び出して障害児のための最良の方法を研究しているという噂は誰しもが耳にしたことがあるだろう。博士は，教育者でもあり医者でもあるという自らの立場より，自分の研究の方向を決定した。それがローマのスラム街での学校の開設であった。そこでは，今まで学校に通えなかった児童（障害児）を対象とし，今までにない教育法と教具を活用した。そして，健常児がもとめられている発達水準よりも驚くほど高い状態に子どもたちを成長発達させたのであった。

子どもたちは，楽々と読み，書き，計算をした。

子どもたちは，自分で身の回りのことができ，衣服の着脱も，自分の食事の準備も，片づけも自分たちでできたのである。

モンテッソーリの障害児たちの成績が公立学校への入学に認められるものであったことが知らされた時，ローマの教育者たちは，モンテッソーリ教育法ににわかに注目しだした。『もしそのような奇跡が障害児に現れるのなら，健常児にその方法が施されたならばどうなるのであろうか？』といった声があがった。モンテッソーリ博士は，健常児によるクラスを設け，比較的優秀な結果を出した。そこで，ローマの最も貧しい地域と同じように最も裕福な地域

にもモンテッソーリの「子どもの家」が設置してあるということとなった。そして，モンテッソーリ教育法はフレーベルの時代から他に関心を持たずに眠り続けていた全教育界から注目を集めた。」という記事である。

これほど熱中するほどのことではないとの意見もある。しかし，モンテッソーリ女史が教育界で評判となっていることは否定できない。

ローマのモンテッソーリ教員養成は毎年4ヶ月間開講されているという。全部で32の講義がそれぞれ2週間の期間で，イタリア語で講義された。授業料は250ドル。1913年は，85人の受講生のうち60人がアメリカからの参加者であった。1908年モンテッソーリの最初のクラスが開かれ，彼女の最初の著書が出版されたのは1909年であった。ローマで学んだアメリカ人は，アメリカで子どものためのモンテッソーリスクールを開校するのに没頭し，1913年の夏，シカゴのハーツ女史は，モンテッソーリ教育法のためのサマースクールを開講した。モンテッソーリ女史の2人の弟子が学校を実践することを担当するために訪れ，貧しい地域の幼い子どもたちが新しい教育法を試すために集められた。

子どもたちの作業を観察することが認められていたサマースクールの受講者は，当初ほとんどが批判的であまり共感的ではなかった。だが，子どもの作業を指導した2人の若い婦人は，非常に堂々としておりしかも慎み深く，結果として承認されるかされないかにせよ，全ての人は，モンテッソーリと彼女の方法に対する2人の献身的なほどの厚い信頼に感動させられた。モンテッソーリの実践学校の6週間の期間，参加した幼稚園関係者やその他の人々には，2人のモンテッソーリ教師へ質問するためにある程度の時間が認められていた。そこで，かれらは，ローマで経験したハリソン女史からの講義について質問した。教具について彼らは解説し，そして，おそらく最も他の何よりも価値のあったものは，幼稚園の理論と実践の関係に関する新しい方法を話し合うため週二回開かれた懇談会であった。

・質問会

以下のような質問があった。

1．モンテッソーリの教師は何人ぐらいの子どもを教育することができるでしょうか。50ぐらいですか。

回答－何人なのかやってみましょう。

2．40人の子どもに対して教具のセットはいくつ必要ですか。

回答－2セットです。ですが，それぞれ別の戸棚の中に保管して下さい。

3．50人の子どもに対して何人の補助の教員が必要ですか。

回答－1人です。それと教室には1人のメイドが必要です。

4．子どもが教具を床にたたきつけたとき，教師は何をすべきでしょうか。

回答－まず，何故そうしたのか訳を聞かなくてはなりません。おそらく子どもは上手く出来なかったのかもしれませんし，興味がなくなったのかもしれません。もし教具を拾い上げるように言いつけられたら，朝の全部の活動がダメになってしまうかもしれません。も

し，子どもはむやみに注意されて活動を禁止されなかったなら，後で，ちゃんと教具を拾い上げることを理解し，自分や他の人のためにも教具を片づけ始めるでしょう。

5．モンテッソーリは他の人に反抗したり，あるいは怒ったりするといった問題を阻止するために何をしますか。

回答－モンテッソーリは子どもにそれが迷惑であることを話します。もし，子どもがそのままやり続ける時は，部屋から彼を出します。もしそれもしなかったなら，彼女は彼に対して健康診断をするでしょう。

6．モンテッソーリ女史は子どもに何を禁止するのでしょうか。

回答－私たちは非常に多くのことを禁止しすぎています，最良の方法は，模範を示すことです。

・懇談会

いくつかの質問は重要なものであった。

モンテッソーリの教具を幼稚園に導入したいのですが？

回答－わたしたちはモンテッソーリのやり方で幼稚園の教具を活用しています。一つの戸棚が，子どもたちが行って好きなものを選べるように備えてあります。

1．子どもたちは踊ったり，ピアノを弾いたり，お絵かきをしたりあるいは自分の好きなブロックで遊んだりします。

2．私たちは教具を使います。しかしとても幼い子どもとは一緒についています。

3．私たちはワシントンの幼稚園にモンテッソーリ教具を導入しました。しかし，5人の無関心な子どもたちはクリスマスまで待ちました。

4．モンテッソーリ教育法なしにモンテッソーリ教具を活用することはできません。

5．もし教具を活用するなら，幼稚園のプログラムの多くをどうやって維持していけばいいのでしょうか。

・身体面へのトレーニング

モンテッソーリ女史は，誰よりも身体面へのトレーニングに関する幼稚園での実践が先行している。彼女は，身長などの体のサイズの測定の重要性を訴える。バランスのとれた体重を維持するために体重を量り，体重とサイズとの均整をとるために十分な栄養を摂ることである。モンテッソーリは，身長と年齢のバランスをとった上での平均的な体重の表を作成している。まだ幼稚園教育者たちは，体重と身長を同時に見ることにあまり関心を持っていなかった。

モンテッソーリは休養に関しても重要視していた。絨毯が休むために備えられ，子どもたちは，手足は遊びながらも体を横にしてくつろげた。この休養は精神を整えていった。子どもたちは部屋を歩きまわったり，好きな場所に変えたいときには，立ち上がることが認められていた。子どもたちが課題をしたくないとき，それは，子どもたちの脳が休養を欲しがっているサインである。女史は，教師から解放されるために庭での自由遊びをすることを主張している。子どもたちは時に看護婦や母親や教師の目から逃げることが必要である。

・いくつかの成果（サマースクールで得たもの）

サマースクールが修了したとき，午後にモンテッソーリ教育法から習得した成果について話し合う公聴会が設けられた。一部は以下の通りであった。

1．子どもたちが感情を表現する自由を尊重すること
2．無気力で怠そうにしている子どもたちは，好奇心が発展途上であるということを知った。
3．教師たちは子どもたちの背後に留まっておくべきであることがわかった。
4．大事そうに教具を片づける子どもたちの姿に感動した。
5．自由とわがままとしつけとの相違がわかった。
6．一人の子どもの完全なる自由は他者の権利を妨げることを認められていることとはいかに異なっているかということに驚いた。
7．子どもたちが協力して課題をするための適切な方法に感動した。
8．教師の静かな態度は，見た目も美しく，教師に手助けを求めにやってくる子どもの信頼と自由をもたらしていた。
9．教師は，何も語らないもしくはほんの少しだけ話すのが適切である。
10．子どもの興味と行動面での成長に感動した。
11．教師の落ち着いた姿勢は美しい。
12．子どもたちは自分たちが思いついた課題をする自由が与えられていた。
13．神経質な子どもたちにとって，（モンテッソーリ教育法は）好ましい内容である。彼らはしてもしなくてもいい。好きなようにしていい。よって，サークルの中で遊ぶのに飽きてしまった子どもたちはいなかったのである。
14．教師には，神聖で機敏でしかも知的な忍耐力が必要であることに気づいた。
15．教師は，低い声で少しだけ語るのが理想的である
16．子どもたちには恐れや気兼ねといったものがないことに感動した。

モンテッソーリ女史は子どもの自由を基本に置いている。あたかも聡明な大人のように行儀良くしている3歳半の子ども，彼には完全なる自由が認められている。ゆっくりと時に素早く，彼の中にある不思議な力が成長し開花していくのである。小さな大人になるために子どもへ対するたゆまない努力は，その力を拡大していく。それは，世界の思想家たちが私たちにずっと伝えてきたものである。子どもたちを紳士淑女と同じように扱いなさい。イタリアの借家からきた子どもたちと下品で野蛮な親たちであっても，優しさと自由のもとで子どもの家の中で楽しんだ彼らは，最も洗練された文化の仲間入りをしてマナーと品格を自然に身につけていった。

・注意事項

モンテッソーリの方法の一番の特徴と思われる『完全な自由』は，我がままや不注意や混乱と混同してはならない。この新しい方法を興味をもって学ぼうとするものは，モンテッソーリの著書の『しつけ』の章を読むとよい。そこには彼女が子どもたちに自由に自己表現させたいと望んだと全く同じ程度に，しつけもまた彼女がねらい求めたものの一つであることが記されている。

アニー　L．ハウ．

ハウのこの講演の中で繰り返し強調されていたことは，静かな教師の態度であった。子供たちの活動に指導をしすぎることもなく，子どもたちの問題行動に対しても冷静に対応する姿勢はサマースクールの参加者達からの評価が高かった。教師のこういった消極教育の姿勢と密接な関係に子どもの自由の尊重がある。ハウの講演でも子どもの自由が強調されていた。特に子どもの自由については，最後に注意事項として重ねて言及するほどであった。

ハウの2回目の講演は，1ケ月半後の同（1914）年9月18日に神戸幼稚園で行われた。この会は，ハウの帰国歓迎会として催された。記録によると，「神戸市内保育者は勿論小学校職員及遠く明石御影大阪の保母諸氏多数参会があり，来会者約百余名」の盛会であったという[15]。開会の辞の任を務めた小磯神戸保育会長は「ハウ先生は今度米国に帰り新しい保育の方法を研究し観察し今後又々新しい勇気と新しい力を以て働かんとして居られます。老いたる人が新しい学問を吸収して新しい勇気と力を以てやれば若い人よりも経験に豊富であるだけ何事によらずたしかに其の効は大であります」と述べているように，この会の主題はハウがシカゴで見聞したモンテッソーリスクールの報告であった[16]。そして，ハウは次のように報告した[17]。

> 私は昨年の夏シカゴで開かれましたモンテッソリー主義の夏季学校にまいりました。（略）モンテッソリー女史が自由を貴ぶと云ふ事には間違いありません。同女史はいつも神様の様な忍耐を持つて居る事には感心いたします。普通人の云ふ忍耐は無言で耐え忍ぶと云ふ事でありますが同女史の忍耐はいつも考えて熱心に勉強して働いて居る事であります。私は昨年シカゴで四週間モンテッソリー主義によつて貧民の子供を集めて保育した会に臨みました。其の先生は二人の米国婦人でかつてローマに行つてモンテッソリー女史について学んで来た人であります。そこでは先生は無言の態度で子供にはモンテッソリーの器具を持たせて遊ばせて居りました。子供は初め大騒ぎをして居りました。しかし先生は猶も無言で其子供等の状態を綿密に観察して子供の為にどうしてやりませうか。此子供の為には，其子供の精神状態は如何と。それぞれ個々に付いて十分に考えて適当な方法を採って居りました。斯様な様子でありますから短時日に於いて効はあらはれませんでしたがいつも子供の為に考えて居ると云ふ事はたしかであります。其他私は長い間モンテッソリー女史の教育法をうけた処の学校も参観しました。そこでは例の沈黙をやつて居りました。子供が騒いで居ります時に先生が『静かにせよ』と書き出しました。其れを見た時子供は極めて静粛にしました。さうするうちに一人の子供は立つて先生の側にまいりました。これは先生が極めて小さな声で其子供の名を呼んだからであります。兎に角モンテッソリー女史は衷心より活動し活動するに充分の忍耐をして居るのであります。

ここでも強調されたのは「子どもの自由」と，それにかかわる「静かな保育者の態度」であった。保育者は「無言で其子供等の状態を綿密に観察して子供の為にどうしてやりませうか。此子供の為には，其子供の精神状態は如何と。それぞれ個々に付いて十分に考えて適当な方法を採」[18]って

いたのである。つまり，子どもに干渉的に働きかけるのではなく，静かに接した上で子どもの観察や細やかな配慮を行う消極教育がこの時も主張された。ハウの消極教育と子どもの自由を尊重した保育の主張は，この後も継続して行われた。

4．ハウによるモンテッソーリ教育法の受容

1914（大正3）年の日本への帰任した直後に，ハウはアメリカの知人よりモンテッソーリ教具を寄贈してもらった記録がある。それには「米国に在るハウ嬢の友人より左の諸品を寄贈されたり。洋琴，ビクトロラ，印字機，材料箱及書籍用戸棚，モンテソリー教育材料，幼稚園用新材料，楽曲書籍」とある[19]。ハウは頌栄幼稚園でのモンテッソーリ教育法の実践に関する講話を，1915（大正4）年3月10日に神戸市明親尋常小学校で行われた神戸児童学会第1回常集会の席上で行なった[20]。また，同年のJUK第9回総会でも次のようなモンテッソーリ教育法の実践報告を行った。

「われわれはモンテッソーリの自由を，そのいくらかを用いてみようと試みた。だが，そのいくらかが魔法のように働いた。子ども達は喜んでこれに応えた。マーチにあわせて自由に表現したり，鳥に餌をやったり，会集後の後かたづけをしたり，ゴミを外に捨てに行ったり，ゲームの時間になると重い平均台を運び，終わるとかたづけまでするようになった。会集の時間にも子ども達は，その行われているプログラムの一部を受け持つことが許された。各自が同時に様々の手工や劇で主題に応じた表現をする機会が与えられた」[21]

実践だけでなく，保育者養成にもモンテッソーリ教育法は導入されていく。表2として以下に示した1925（大正14）年の頌影保母伝習所カリキュラムによると，第2学年の第3学期に保育法実地練習でモンテッソーリ教育法を50時数履修することになっていた[22]。しかし，全てモンテッソーリ教育法に移行したのではなく，表2からもわかるように第1学年1学期には「フレーベル伝」を31時数履修をさせていた。フレーベルを土台にしながら新しい知識であるモンテッソーリ教育法も教授していく姿勢は，中間派の影響が考えられる。

ハウのモンテッソーリ教育法の実践は，フレーベル教育思想と併行しながら試みられた。ハウは，両者について次のように記している。

「教育上に於て『新しい』と名づくべきものは，何れも皆，フレーベル説から発生したもののみであるということを御記憶願いたい。例えばモンテッソーリは，幼稚園に関して別に立派な説を持っていないが，彼女の教育法の中で最も優れた点の一つは，『個人的発達の自由』である。だが，これは又フレーベル教育思想の特徴でもある。フレーベルは，『人の教育』の第七章の『故に，教授及び訓練の教育は，根本的にかつその最初の原則からいえば，必ず受動的であるべきであり，ただ，警戒と保護以外の慣例的・絶対的干渉によってはならない』

表2　1925（大正14）年の頌影保母伝習所カリキュラム

			学科	時数
第一年	第一学期	（日五十五）週一十	聖書（イエス伝）	五五
			恩物	五五
			母の遊戯	五五
			フレーベル伝	三一
			児童性質研究	二四
			唱歌	五五
			器楽（オルガン）	一一
			オルガン練習	五五
			図画	二二
			生花	一一
			朝の礼拝	五五
			合計	四二九
	第二学期	（日五十七）週五十	聖書（イエス伝）	七五
			開発的生活	七五
			談話	七五
			同上	三五
			同上	七五
			同上	一五
			同上	七五
			同上	七五
			同上	三〇
			同上	七五
			同上	一五
			同上	七五
			同上	六二〇
	第三学期	（日十五）週十	聖書（書翰）	五〇
			同上	五〇
			幼稚園原理	五〇
			色の原理	五〇
			遊戯	五〇
			同上	五〇
			同上	一〇
			同上	五〇
			同上	二〇
			同上	一〇
			同上	五〇
			同上	四四〇
第二年	第一学期	（日五十五）週一十	聖書（旧約書）	五五
			人間の教育	五五
			自然物研究	五五
			心理学	五五
			唱歌	五五
			器楽（オルガン）	一一
			オルガン練習	五五
			図画	二二
			生花	一一
			朝の礼拝	五五
			保育法実地練習	五五
			合計	四八四
	第二学期	（日五十七）週五十	同上（同上）	七五
			教育史	七五
			クリスマス贈物ニ関スル手工	七五
			同上	七五
			同上	七五
			同上	一五
			同上	七五
			同上	七五
			同上	三〇
			同上	一五
			同上	七五
			同上	七五
			合計	六六〇
	第三学期	（日十五）週十	同上（同上）	五〇
			子供の問題	二〇
			西洋美術	一二
			同上	九
			同上	五〇
			同上	一〇
			同上	五〇
			同上	二〇
			同上	一〇
			同モンテッソリー	五〇
			衛生学	子供伝染病池田医師
			学校衛生横田医師	
			子供の食物安永医師	
			合計	三三二

1925年（大正14）のカリキュラム

（高野勝夫『エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み』頌栄保母短期大学，1973，p.220.）

という思想においてモンテッソーリを越えている」[23]。

ハウは，モンテッソーリ教育法の消極教育をフレーベルの「教授及び訓練の教育は，根本的にかつその最初の原則からいえば，必ず受動的であるべきであり，ただ，警戒と保護以外の慣例的・絶対的干渉によってはならない」とする言説の一部を実践したものと位置づけさせていく[24]。

19世紀末から起こった形式化・固定化したフレーベルの象徴主義とそれにともなう恩物至上主義への批判は，フレーベルの原点への回帰を志向するものとなっていた。

ハウのモンテッソーリ教育法の受容は，フレーベル教育思想である幼児の自発的活動，特に遊びに創造的価値をおき，保育者には消極教育を求めるという主張と符合し押し進められたのであった。

この姿勢が，日本におけるフレーベル主義を土台とした幼児教育の上にモンテッソーリ教育法を取り入れていく一つの模範となったと考えられる。

注

1）わが国におけるモンテッソーリ教育法の特徴については，全国地方教育史学会第19回大会にて口頭発表（「島根県におけるモンテッソーリ教育法の受容と実践」）を行った。この他，竹田宏子「倉橋惣三によるモンテッソーリ教育法の紹介とその影響」『中国四国教育学会教育学研究紀要』37巻，1992，竹田宏子「大正期におけるモンテッソーリ教育法の受容－神戸幼稚園を中心に－」『広島大学教育学部紀要』42号，1993，竹田宏子「野口援太郎によるモンテッソーリ教育法の受容と実践－姫路師範学校附属城北幼稚園を中心に－」『広島大学教育学部紀要』43号，1994などがある。

2）『全国幼稚園関係者大会記録』，1916，p.165.

3）高野勝夫「エ・エル・ハウ女史の日本保育史への貢献－フレーベリズムの導入紹介者としての貢献」『頌栄短期大学研究紀要』1975.

4）W.Heilman : "*Opening address*", National Education Association, 1885, pp.349-351.

5）A.Bryan : "*The letter killth*", National Education Association, 1890, pp.573-581.

6）L.Weelock : "*Opening address*", National Education Association, 1895, p.512.

7）1906（明治39）年に保育に関係する宣教師達の連絡統一機関としてＪＵＫは創立された。目的は，日本の保育界の結集とアメリカの保育界との連携であった。万国幼稚園連盟に加入し，その支部となった。

8）日本キリスト教連盟編『*Annual Report of the Kindergarten Union of Japan* 1907-1939)』日本らいぶらり，1985.

9）倉橋惣三「論説」『京阪神連合保育会雑誌』29号，1912,p.15.

10）久保良英「モンテッソリー女史の講演をきく」『心理研究』26号，1914，p.89.

11）Rita Kramer "*Maria Montessori : A Biography*" 1976, p.245.

12）山中茂子訳『A．L．ハウ書簡集』頌栄短期大学発行，1993,P.271.

13）"*New York Tribune*" (December 3, 1913, December 4, 1913, December 7, 1913), "*The New York Times*" (December 7, 1913, December 9, 1913.), "*The New York Herald*" (December, 1913, December 7, 1913)。

14）A.L.Howe `Montessori Method in the United States' "*Eighth Annual Report of the Kindergarten Union of Japan*" 1914, pp.1-6.更に同会で，トムソン（Gazelle R.Thomson）は，ローマのモンテッソーリの「子どもの家」での参観報告を行った。(Gazelle R Thomson `A Visit to the Home of Childhood in the Via Ginsti, Rome' "*Eighth Annual Report of the Kindergarten Union of Japan*" 1914, pp.7-13.)

15)「エー・エル・ハウ女史歓迎会」『婦人と子ども』14巻10号1914, p.455.

16) 前掲注, p.456.

17) 前掲注15), pp.457-459.

18) 前掲注15), pp.457-459.

19)「第八章区内公私立幼稚園の沿革」『神戸区教育沿革史』1915,p.576.当時日本では，京都大学の野上俊夫が研究室で自作したモンテッソーリ教具を活用した講演会・講習会が盛んであった。玩具製作販売のフレーベル館においては，同年4月に試作品をフレーベル会第18回総会で展示をしている。ハウが日本に戻った7月には，大阪天真堂が30円でモンテッソーリ教具を販売開始した。ローマでは80円，ロンドンでは200円とかなり高価な教具であった。

20)「雑報」『児童研究』18巻9号,1915,p.336.

21) "*Nine Annual Report of the Kindergarten Union of Japan*" 1915.

22) 高野勝夫『エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み』頌栄保母短期大学, 1973, p.220.

23) Miss A.L.Howe『信仰』頌栄幼稚園, 1916, pp.55-56.

24) 前掲注